

## 第2学年 体育科学習指導案

児童数 49名  
指導者 荒木 裕治  
松岡 由希子

### 1 単元名 みんなでつくろう スーパー玉がっせん

### 2 単元について

子供たちは、1年時の「ボール遊び」「ボール投げゲーム」、2年1学期の「ボール投げゲーム」で、簡単なボール操作を学習してきた。ねらったところにボールを投げたり、距離を伸ばしたりすることが難しく、思うように投げることができずに苦戦している子供の姿が多く見られた。また、休み時間にはドッジボールやキャッチボール等のボール遊びを楽しむ子供、室内遊びを楽しむ子供がおり、子供の遊びが概ね固定化している。こうした実態から、投げる経験が不足していること、投げる際の体の動きを子供が知らないことなど、半数近くの子供がボール遊びの楽しさを実感していない実態が分かってきた。

本単元で実践する玉合戦は、雪国の伝承遊びとして昔から親しまれてきた雪合戦を競技化した「スポーツ雪合戦」を屋内で取り組めるようにしたゲームである。小学校学習指導要領解説体育編には「主として集団対集団で、得点を取るために友達と協力して攻めたり、得点されないように友達と協力して守ったりしながら、競い合う楽しさや喜びに触れることができる運動（遊び）である。」とボールゲームの内容とねらいが記されている。そこで、本単元の本質を「チームで作戦を考え、友達と協力してゲームを楽しむこと」、「楽しいゲームになるようにルールを工夫して活動すること」であると考えた。技能として、ボール操作とボールを持たないときの動きで構成されており、シェルターと呼ばれる拠点をうまく活用して攻める、仲間に玉を送る、宝を守るなど、一人一人がチームの一員として、自分の持ち味を発揮して、一定時間内に得点を競い合うゲームを行う。作戦を遂行する力、そして、作戦にはなくても、状況に応じて自ら考え、判断し、臨機応変に行動する力を高めていきたい。この力を身に付けることにより、攻防のためにボールを制御する技能(ボール操作技能)と相乗効果が発揮され、更に仲間とゲームの楽しさや喜びを共有することができると思う。

本単元では、一人一人の子供が玉に触れる機会や、ルールに適した作戦を子供同士が話し合う機会を多く設けることで、個人の力を発揮しながらチームで協力することができるようにしていきたい。そのために、第二次、第三次の冒頭には追加のルールがあることを子供たちに伝える。追加ルールによってこれまでの経験を生かして作戦を立てたり、新しい発想で作戦を切り替えたりする必要感が生まれてくるだろう。また、練習中に互いに認め合い、励まし合える言葉かけ、ゲーム中での挨拶、応援を大切に、友達との肯定的な関わり合いが生まれるようにする。さらに、掲示物や子供のモデリング等の視覚からの情報と説明を併用し、ゲームに必要な動きや状況判断を理解したり、チームで攻め方を工夫したりしながら楽しくゲームができるようにしていきたい。

第一次では、玉合戦のルールを知り、ゲームを楽しむ。第二次では、追加ルール①（出場するメンバーを自分たちで決めることができる）、第三次では、追加ルール②（宝とシェルターの配置を自由に変えることができる）を取り入れ、新しいルールに対応できるように作戦を考えたり、練習をしたりしてゲームを行う。第二次、第三次の終末では、ルールに合わせた作戦や実際の動き等について振り返り、互いの意見を聴き合う。また、単元全体を通して、子供が常に友達と関わりながら、試行錯誤し、学んだことを生かして課題を解決する過程を大切にしていきたい。

### 3 単元の目標

- ・ゲームを楽しく行うための簡単なボール操作や動きを身に付けることができるようにする。  
＜知識及び技能＞
- ・ゲームの動き方を知り、ゲームの規則を工夫したり、攻め方を決めたりすることができるようにする。  
＜思考力、判断力、表現力等＞
- ・友達と協力し合い、励まし合って、仲よく安全にゲームを楽しむことができるようにする。  
＜学びに向かう力、人間性等＞

#### 4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①玉合戦の行い方について、言ったり書いたりしている。</p> <p>②ねらったところに向かって玉を投げたり、相手陣地にある宝を取りに行ったりすることができる。</p> <p>③ルールを理解して、玉合戦ができる。</p>	<p>①状況に応じて玉の投げ方を工夫したり、試しのゲームをしたりしている。</p> <p>②玉合戦で自分ができる役割を選んだり、宝を取るための作戦を考えたりしている。</p> <p>③友達のよい動きを見付けたり、考えたりしたことを友達に伝えている。</p>	<p>①玉合戦に進んで取り組もうとしている。</p> <p>②ルールを守り、誰とでも仲よくしようとしている。</p> <p>③使用する用具の準備や片付けを、友達と一緒にしようとしている。</p> <p>④障害物がないか、友達とぶつからない十分な間隔があるかなど、場や用具の安全に気を付けている。</p>

#### 5 研究主題との関連

##### 研究主題

個別最適な学びを通して主体的に学ぶ子供の育成  
 — 自啓教育を核とした授業実践を通して —

##### 視点1 主体的な学びにするための工夫

- (1) 一人一人の子供が考えてみたい、やってみようという意欲が高まるような教材提示の仕方の工夫
- ・技能レベルを考慮した平均化されたグループを設定する。
  - ・ゲームの中で、攻める、仲間に玉を送る、守るなど自分が得意なプレイを意識できるようにしたり、ゲームの運営について仕事を役割分担したりしてチームへの所属意識をもち、協力して活動できるようにする。
  - ・課外の時間に自分たちの思いや願いを込めた宝(旗)のデザインやチーム名、応援コールを考える。
- (2) 課題解決に向けて粘り強く取り組むための環境づくり
- ・作戦タイムでは、ピリオドごとに作戦ボードを使って、プレイヤーに見立てた磁石を動かすことで、チームで作戦を考えやすくなるようにする。
  - ・チームの作戦や課題に応じてコートやシェルターを使って練習できるようにする。
  - ・学習計画表に毎時間の振り返りを書き、課題に対するチームでの作戦やゲーム中の自分の動きについて自己評価することで、有効な作戦や自分の得意な動きを理解できるようにする。

##### 視点2 協働的な学びにするための工夫

- (1) 必要感のある対話を生むための学習過程の工夫
- ・追加ルールを提示することで、新しいルールの中で作戦の幅を広げ、ゲームの進め方や相手チームへの対応を考えることができるようにする。
  - ・試しのゲームや対話の場面を一人学び、グループ学び等、場面に応じて学習形態を工夫し、必要に応じて教材や友達と対話しながら、自分の考えを明らかにしたり深めたりできるようにする。
  - ・ピリオドの終了の際に、交代する仲間に相手チームのプレイヤーについて助言したり、仲間のプレイを称える、鼓舞するなどのエールを送ったりできるようにする。